

ヒューマンライブラリーの実践と今後の課題

関 久美子

On the Practice of Human Library and Its future Issues

Kumiko Seki

1. はじめに

2020年のオリンピック、そしてパラリンピック開催へ向けて、「福祉」という以外にも社会における「多様性」とその「共存」という課題に対し、開催国の日本だけでなく世界の関心が高まっている。産業界でも「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のためのSDGs（持続可能な開発目標）が2015年9月の国連サミットで全会一致で採択され、2030年を年限とする17の国際目標が掲げられており、その中にはすべての人への健康と福祉の提供、ジェンダーの平等、社会の平等など社会的包括の実現もうたわれている¹。

ヒューマンライブラリーは「障がい²をもっていたり、人種的なマイノリティであったりすることで人々から近づきにくいと思われたり、偏見を受けやすい立場にある人が、『本』となって30～45分程度貸し出され、『読者』は1対1で、あるいは1対数人でその『本』の語りに耳を傾け、対話がなされるという特別な『図書館』（イベント）である」（横田2012, p.155）。自己とは異なる背景を持つ「本」役の人々との対話を通して「読者」（イベントの来場者）は単純にその「本」の持つ属性についての知識を得るだけでなく、社会の多様性を理解し、同時に意識的・無意識的に持つステレオタイプや偏見に気づき、それらと対峙するきっかけとなる。この取組みは、偏見を低減することや多様性に寛容な心を育てる等の実践的なイベントとして各地で行われている（坪井 2017, p. 65）。社会全体が多様性の共存に向かう中、その実現のためには社会の構成員一人一人がそれに対する理解を深めることは不可欠であり、ヒューマンライブラリーはその目的に資する非常に有効な手段の一つと考える。

2018年10月、筆者の所属する新潟青陵大学・短期大学部地域貢献センター（現社会連携センター）では「ふわりとつつむ」をテーマに地域の多文化共生を目指し、「あなたを知って私を知りたい～ヒューマンライブラリー@SEIRYO」と題して同イベントを開催した（関、岩森、他2019）。その実績が新潟

¹ SDGsとは？ JAPAN SDGs Action Platform 外務省
(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>)

² 「障がい」「障害」の表記に関しては主観的な見解によって議論がなされるが、本稿では原則その言葉を使用した者が記した表記に従い、それ以外は「障害」の表記を使用する。

県に評価され、2019年には、「天皇陛下御即位記念 第34回国民文化祭・にいがた2019、第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会³ 障害者芸術・文化事業」の一つとしてヒューマンライブラリー新潟実行委員会（新潟青陵大学・短期大学部社会連携センター、新潟医療福祉大学シティズンシップ教育実践研究センター）が実施主体となり「ニイガタヒューマンライブラリー 2019」が新潟市と新発田市で開催された。ヒューマンライブラリーが行政の助成金等を利用して開催される事例はあるが、県の事業として開催されるのは日本で初めてのことである。

今回のヒューマンライブラリーは、特別企画としてセミナーや講演会なども開催されたが、本稿では2019年11月10日（日）に筆者の所属する新潟青陵大学・短期大学部で開催されたヒューマンライブラリーの開催に向けた「学生司書プロジェクト」を含めた一連の実践報告と、前年度と併せてヒューマンライブラリーの2回の開催を終え、それらを踏まえた上での今後の課題について議論することを主たる目的とする。

2. ニイガタヒューマンライブラリー 2019実践報告

2-1. ヒューマンライブラリー学生司書プロジェクト

新潟青陵大学・短期大学部で開催されたヒューマンライブラリーの実施主体は同大学の社会連携センターであるが、前年度に引き続き「学生司書プロジェクト」⁴を立ち上げた。「司書」とは「本」を貸し出す主催者（スタッフ）であり、準備から当日の運営までを担う。新潟青陵大学から臨床心理学科4年生1名、1年生3名、社会福祉学科4年生6名、看護学科2年生1名、新潟大学短期大学部から人間総合学科2年生18名（ゼミ活動として参加）、1年生3名、幼児教育学科1年生1名の合計33名がこのプロジェクトに参加した。前年度のプロジェクトは12名の参加があったが、今回約3倍に増え、学生の中でのヒューマンライブラリーの知名度、そして多様性の理解への関心が高まったことがうかがえる。

日本で開催されるヒューマンライブラリーは大学のゼミや有志学生を募ってアクティブラーニングの一環として行われているところも多く、「本」の選定から参加依頼、資金集め、告知・宣伝、そして当日の運営と一連の流れを学生主体で行っており、ヒューマンライブラリー運営は学生への高い教育効果をもたらすと報告されている（工藤 2012、横田 2018）。本来この「学生司書プロジェクト」でも同様の活動内容が理想ではあるが、参加学生の主軸が筆者ゼミの短大2年生であることから、経験値への懸念や就職活動と同時進行で企画や準備を進めることに限界があり、またその他の参加学生も学科や学年の違い、加えて実習系の分野であるため、物理的に全学生が協働することが困難という理由から、（学生の話し合いを参考にした）「本」の選定と参加依頼は筆者が行い、「学生司書」の主たる活動は「あらすじ」作成と当日の運営に設定した。

「あらすじ」はヒューマンライブラリー当日、会場に掲示される「本」の紹介文である。タイトル、サブタイトル、「本」の属性を表すハッシュタグ、「本」を紹介するあらすじ本文、そしてあらすじ作成を担当した学生からのコメントで構成されており、「読者」はその「あらすじ」を参考に読みたい（対話したい）と思う「本」を選択する。「学生司書」は担当の「本」と直接会い、遠隔地の場合はビデオ会議システムを利用するなどして、「本」のライフストーリーやそこで抱える葛藤、生きづらさ、それ

³ 天皇陛下御即位記念 第34回国民文化祭・にいがた2019、第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会
(<https://niigata-futtotsu.jp/>)

⁴ 2019年度新潟青陵大学短期大学部学長教育改革助成金事業として採択。

らを克服した現在、あるいは今なおそれと対峙する姿、考え方や価値観を聞き取り、それらを学生自身の言葉で「あらすじ」としてまとめた。「あらすじ」作成を終え、自己の中にどのような変化が起こったか、学生のレポートから一部抜粋して紹介する。

- ・ 自分の知らない場所、考えもしないところで、苦悩が存在するのだと改めて分かった。
- ・ 今までよりも敏感に、良い意味で人を見るようになった。
- ・ 最初に持ったイメージがなかなか消えず、悪いイメージをもってしまうとその人を知ろうとすることをやめてしまっていたが、この活動を通して、実際に会って話してみないと良いところも悪いところもわからないということに気づけた。
- ・ これまで正直か関わり方が分からなかった方々と接していく中で、相手のことをよく知らずに壁を作ってしまった。(今後は)街中で(いろいろな属性の人を)見かけた時に声をかけたいという気持ちに変化した。
- ・ Aさんが視覚障害者の方のサポートの仕方を教えてくださったので、街中で白い杖を持っている方を見かけたら「私が絶対に声をかけるぞ!」と思えるようになった。
- ・ その属性だからみんなが同じというわけではなく、一人一人違うエピソードがあるので、初めて会った方には、その人自身に向き合っていきたいと感じた。
- ・ 自分のために参加していた「学生司書プロジェクト」だが、「本」の方にお会いする中で、自分の担当するSさんのために、また他の「本」の方のためにという気持ちが大きくなった。偏見をなくしたいと思っても今まで行動に移すことはなかったが、その活動をできて嬉しい気持ちと責任を感じている。
- ・ 他者のつらい人生に誠意をもって向き合うことによって、他人事ではないと思ったし、担当していない「本」の方々、そしてもっと多くの方と関わりたいと改めて思った。
- ・ 自分の中の価値観だけで人や物事を判断することは、自分で自分のコミュニティをどんどん狭めていくことになると思った。
- ・ 私自身も生きること感謝し、どんな自分であれ私は一人しかいないので自信を持たなければならないと感じた。

実際のヒューマンライブラリーでは「本」との対話は30分間と限られているが、「学生司書」はこの「あらすじ」作成を通して「本」と親密なコミュニケーションを重ねることになる。「本」の持つ属性に関する知識を得るだけではなく、同情的感情が共感に変化する様もみうけられる。また、自己の物の見方を振り返り、さらに自己の世界観を再構成していることが分かる。

従来のアクティブラーニングで期待される学習効果は、対人コミュニケーション能力、問題解決力、論理的思考力、実行力といったスキル向上といったものであるが、この「学生司書プロジェクト」は「学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結び付けると同時にこれからの人生につなげていけるような学習」(松下2015、p.23)と定義されたディープ・アクティブラーニングの実践にも繋がると考える。

「あらすじ」作成に加えて、「学生司書」が多様性について学ぶ機会として複数回に渡り、ヒューマンライブラリーの「本」役を迎えて勉強会を行った。その他にも筆者が「本」と懇談を行う際、「本」が開催する活動、またそれ以外にも多様なサブカルチャーについて学習する機会には学生の参加を促した。以下はその詳細である。

日時	勉強会	内容	参加 学生数
6/14	福祉事業型専攻科 KINGO カレッジ ⁵ 訪問	知的に障害のある学生が学ぶカレッジへ訪問、自己紹介やゲームなど行い交流を図った。（筆者担当のゼミ活動として）	6名
6/26	勉強会① 死に携わること	元葬儀職の K さんから、「人の死」に関わる仕事についてお話いただいた。（筆者担当のゼミ活動として）	18名
6/26	天上の音楽 ⁶ ライブ鑑賞	うつ病の経験者で、現在は音楽を通してのターミナルケアを実践している H さんのミニライブを鑑賞したあと、お話をうかがった。	3名
7/10	勉強会② LGBT	ご自身が X ジェンダーであることを公表されている T さんから LGBT の基本知識を学ぶと同時に T さんの経験についてお話いただいた。	25名
7/12	「本」との打合せ	ヒューマンライブラリーに「本」として初めて参加される、聴覚障害をお持ちの K さんと筆者で打ち合わせを行った。	1名
7/17	勉強会③ 東日本大震災	東日本大震災で福島から新潟に避難されている G さんから、地震発生当日の様子やその時の想いなどをお話いただいた。	22名
7/24	勉強会④ 里親・里親支援	ご自身も親族里親を経験され、現在は里親支援をしている S さんから「里親って？里親になること」をテーマにお話いただいた。	24名
7/31	勉強会⑤ 筋痛性脳脊髄炎/慢性 疲労症候群	慢性疲労症候群という病をもたれている N さんから、病気についての基礎知識や患者の現状、N さんご自身の経験なども含めてお話いただいた。	23名
9/25	ヒューマンライブラリー セミナー&体験会 ⁷	筆者が講師として行ったヒューマンライブラリーセミナー&体験会にスタッフ、「本」として参加した。	5名
10/19	アール・ブリュット セミナー&ワークショップ ⁸	社会連携センター主催のセミナー&ワークショップ。障害を持つ方たちが制作された作品を鑑賞し、支援者との対話を通して作者の魅力について話し合った。	6名

2-2. ヒューマンライブラリー合同リハーサル

ヒューマンライブラリー本番を1か月後にひかえた10月初旬、新発田市でのヒューマンライブラリーの「本」、運営に携わる新潟医療福祉大学の「学生司書」と合同で、顔合わせ会も兼ねた「読書」のリハーサルを新潟青陵大学・短期大学部で行った。「本」20名、「学生司書」28名、筆者を含む教員2名、合計50名が参加した。「読書」は「対話」が基本になることから、時として「読者」からの発言や質問を促

⁵ 障害者総合支援法に基づく自立訓練（生活訓練）を利用した2年間の教育事業（<https://www.kingo-college.jp>）

⁶ 天上の音楽～ハートケアコンサート～（<https://www.tenjo.jp/>）

⁷ 天皇陛下御即位記念 第34回国民文化祭・にいがた2019、第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会 障害者芸術・文化事業ニイガタヒューマンライブラリー 2019の関連企画としていわむろや（西蒲区岩室温泉）にて開催。

⁸ 新潟青陵大学・短期大学部社会連携センター「ふわりとつつむインクルージョン講座」として開催された公開講座。

すことや、対話の流れのコントロールなど、「本」にはファシリテーターとしての役割が求められることもある。大まかな進行として、最初の10分は「本」が自己紹介も含めて自身のライフストーリーを話し、あとの20分は自由な「対話」の時間として「読書」のリハーサルを行い、その後参加者全員でディスカッションを行った。

まず筆者からは30分ではすべてを語り切れないこと、「読者」に消化不良的なモヤモヤ感が残っても構わないこと、むしろそのモヤモヤ感やさらなる疑問が生まれることが対話の目的であることを伝えた。前回のヒューマンライブラリーの「本」の経験者からは、「何度も対話を重ねることで自分の語りも上手くなる」「自分が話したいことより『読者』が何を聞きたいかに耳を傾け話すようにしてみてもは」などのアドバイスが出た。『読者』から質問も出ず時間を持て余してしまった」といった意見に対しては、自助グループで対話活動を行っている「本」から「最初の雰囲気づくりとして簡単なアイスブレーキングを行ってみてはどうか」「『読者』から自発的に質問が出ない場合は、あらかじめ質問カードを用意して、そこから質問を選択してもらうこともできる」といった具体的な案も出された。また最後に、「自分の属性について自分でもまだよくわかっていないことに気づいた」「『読者』にしっかり伝えられるようにさらに準備をしようと思った」などの意見も聞かれ、本番に向けた有意義なリハーサルとなった。

2-3. 「ニイガタヒューマンライブラリー 2019@SEIRYO」開催

2019年11月10日（日）、天皇陛下御即位記念 第34回国民文化祭・にいがた2019 第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会 障害者芸術・文化事業「あなたを知って私を知りたい～ニイガタヒューマンライブラリー 2019@SEIRYO」の本番を迎えた。当日の「読書」は12時より受付を開始し、12時30分から16時45分までの間30分ごとの6セッションを用意し、セッションごとに15分の休憩時間を入れた。「本」は原則6セッション中4セッションに参加、当日は20名が「本」として参加した。うち、前年度に引き続き2回目の参加は5名であった。「本」のタイトルとキーワード（属性）のリストは以下の通りである。

	タイトル	キーワード
1	目が見えないことが本当の障がい？ ～障がいのある人もない人も共に生きる社会～	#中途視覚障がい
2	見落とされた病と生きる ～限られた活動時間で啓発活動を～	#筋痛性脳脊髄炎/慢性疲労症候群
3	東日本大震災から考える防災 ～東日本大震災を教訓とし自分がやれること～	#東日本大震災, #避難
4	もし大好きな人に殴られたら耐えられますか？ ～あなたを一人にはしない 女性のための心の自立サポート～	#デートDV #トラウマ
5	君が君であるために ～自分自身を知り、大切に～	#DV 被害者 #虐待 #摂食障がい
6	人の「死」に向き合うこと ～ご葬儀を通してお客様に癒しを～	#お葬儀 #儀式人 #冠婚葬祭
7	病気になって良かった ～うつ病の先にあった新しい見方～	#うつ病 #クリスチャン
8	いいときも悪いときも夢を抱えて ～双極性障害で発達障害でも楽しく生きる～	#双極性障害 #発達障害

	タイトル	キーワード
9	心の病と向き合う ～コンプレックスに自信を～	#パニック障害 #躁うつ #女装 #摂食障害 #引きこもり
10	復活を遂げたマルチアーティスト ～生きづらい社会で何ができる～	#アルコール依存症 #自殺未遂 #いじめ
11	心の痛みを和らげるための痛み ～自傷行為について“あなた”に伝えたいこと～	#自傷行為 #嗜癖行動 #いじめ
12	ペットは"もの"ではなく、"生きもの" ～犬の介護士・リハビリトレーナーとしてできること～	#ペットシッター #犬の介護士
13	目が変だと言われるから抱いて歩けない ～生まれつき左眼が上らない病気～	#眼瞼下垂 #直系遺伝
14	新しい出会い ～里親支援者として～	#親族里親 #里親支援
15	性のあり方について ～自分と向き合うこと～	#LGBT #Xジェンダー
16	Memento mori ～終末を見る～	#終末期医療 #がんサバイバー
17	障がいがない生活 ～24時間ヘルパーさんと共に～	#中途半身不随
18	知的に障がいがあっても大学に行きたい ～ダウン症の「こうすけのために」から始まった今～	#ダウン症の子を持つ母 #KINGO カレッジ 創設者
19	自分の気持ちに素直に生きる ～見えない「恋愛観」～	#アセクシャル #LGBTer
20	聞こえているけど聞き取れない ～軽度・中等度難聴の世界～	#難聴 #筆談

「読者」（来場者）はまず「本」を故意に傷つけない、「本」のプライバシーを厳守するといった「同意書」にサインをする。この「同意書」へのサインはヒューマンライブラリー発祥のデンマークなどでは義務付けられておらず、日本特有のものである。元来、「本」はマイノリティの属性を持つ弱い立場であり、そうした「本」が自らの個人的体験を自己開示してくれる場であることを「読者」に理解してもらう重要なプロセスであるとされている（駒沢大学社会学科坪井ゼミ編2017、p.65）が、昨今この「同意書」の「『本』を傷つけない」という文言が「読者」にとっての大きなハードルとなり自由な対話を妨げてしまうのではないかという議論もある。そこで、前年度使用した「同意書」の「興味本位、または誹謗中傷目的での「本」が傷つくような質問・言動はお止めください」という文章を「『本』の方に、興味のあることを自由に聞いていただいて構いません。但し、誹謗中傷目的での『本』が傷つくような質問・言動を意図的に行うことはおやめください」と変更し、「読者」には「遠慮」ではなく「配慮」を求める内容とした。

サインした「同意書」と引き換えに「読者」は「読書カード」を受け取り、会場に掲示された「あらすじ」をもとに受付で読みたい「本」の予約をする。時間になったら「読書」の会場へ行き、「本」と「読書」（対話）をする。できるだけ多くの「読者」に「読書」してもらうための仕組みとして、同時に複数の「本」の予約はできず、「読書」終了後、15分間の休憩時間を利用し、次の「読書」の予約をするという形で行った。また「本」1名に対して、「読者」は多くて6名までとし、少人数での「対話」を重視した。

前年同様、会場はアクティブラーニング講義室2室、定員50名程度の中講義室1室に「読書」のテーブルを複数設置したオープンでリラックスできる空間を演出した。

今回初めての試みとして聴覚障害を持つ「本」Kさんとの対話は筆談で行った。情報保障として新潟県から要約筆記者を有償で3名派遣してもらったが、「読者」への情報保障を優先し、Kさんには筆者をつけなかった。Kさんは聴覚に障害を持つが発話には問題がない。また実生活で常に筆記者がついているわけではなく、Kさんにとっては筆談が聴者との通常のコミュニケーションの手段となる。「読者」にもぜひ筆談のコミュニケーションを体験してもらいたいということから、Kさんの対話テーブルにはミニホワイトボードを設置、Kさんに対してのコミュニケーションだけではなく、聴者である「読者」同士でも筆談でコミュニケーションをしてもらうという大変興味深い試みとなった。また今回この情報保障制度を利用した「読者」は3名（うちKさんが「読者」として参加した際にも利用）であった。

当日は「本」や「学生司書」も時間が許す場合は「読書」に参加したため、合計で150名以上が「読書」を体験した。国民文化祭・全国障害者芸術・文化祭の一事業として開催されたため宣伝効果も高く、新潟市外からももちろん、さらに大阪、和歌山、宮崎からの参加もみられた。その中には自身の大学や施設でヒューマンライブラリーを開催したいといった視察目的での参加者もあり、その関心の高さがうかがえた。また青陵図書館との共同企画として「本」の方たちが推薦する本の展示を同図書館で開催、加えて以下の通り「本」を講師としてミニ講演会も同時進行で行った。

1) ミニ講演会1「我にカエル まぶたの人生」

講師：眼瞼下垂協会 副理事長 フレイクさん

時間：14：00～14：40

定員：30名

2) ミニ講演会2「心の病は宝物！ ONLY ONE 君にしかできないことがきっとある！」

講師：癒し系表現者 Kaccoさん

時間：14：45～15：25

定員：30名

2-4. 「読者」アンケート結果

「読者」として参加した来場者に対して、選択式・記述式の14の設問（うち問1～6までは国民文化祭・全国障害者芸術・文化祭全体に対する設問、問7～14はヒューマンライブラリーに特化した設問）で構成されるアンケートを実施した。回収数は151名中72名、回収率は47.6%であった。ここでは特筆すべき事項のみ報告する。

「読者」の年齢は「20歳未満」が9.8%、「20歳代」が25.3%、「30歳代」が18.3%、「40歳代」が19.7%、「50歳代」が16.9%、「60歳代」が5.6%、そして「70歳代以上」が4.2%で、うち「女性」の参加が64.2%であった。20歳未満から70歳代以上まで、すべての年齢層に「読者」がいることからヒューマンライブラリーが性別を問わず幅広い年代へアピールする取組みであることが分かる。ヒューマンライブラリーへの参加の理由として（複数回答可）、「自分にとって関心あるテーマの『本』がいたから」が61.1%と最も多く、次に「企画の趣旨、目的に共感したから」が54.4%であった。「以前、別のヒューマンライブラリーに参加していて、また参加したいと思ったから」という回答も16.6%と少数ではあるが見うけられ、前年からのリピーターがいることも推測できる。

「次回、ヒューマンライブラリーがあれば参加したいか」の問に対しては「ぜひ参加したい」が83.3%、「やや参加したい」が15.5%と、すべての「読者」が今後のヒューマンライブラリーへの参加の意思を表したことは、この取組みが一定の評価を受けた結果であると考ええる。また、「どの本を借りたか」（複数回答可）の間では、どの属性の「本」も平均して借りられていたが、その中でもLGBTの属性を持つ「本」に高い関心が集まっていた。「今後どのようなテーマの『本』と語りたいか」（記述式）の問に対しては、身体的・精神的障害を持つ「本」との語りを希望する「読者」が多い中、障害者のピアサポート・障害者雇用関連といった支援に関わる「本」、また子育て中の母親といった生活スタイルにおける多様性に関する「本」、助産師、看護師、eスポーツといった特殊な職業、分野に従事する「本」への関心も見られた。

「本企画への参加を通して、自分の考え方に変化があったか」の間では、「変化があった」が45.2%、「やや変化があった」が37.5%と、大半の「読者」に何かしらの気づきや心の変動があったことが分かる。以下に「どのような変化があったか」（記述式）の問に対する回答を一部抜粋して報告する。

- ・ よく知らなかった世界を少し知れた。
- ・ 障害者の方の気持ちをよく知ることができた気がする。
- ・ Sさんで里親制度の現状を知り、もっと知りたくなった。
- ・ 社会の中で制度の間、縦割りの組織・体制により困っている方々がいることを改めて知った。
- ・ 多様性について改めて考え直す機会になった。
- ・ 育児に対する考え方の根底を見直す機会になった。
- ・ 自分にない考えがあつてためになった。
- ・ 自分が考えていた点と共有できる点が多々あった。
- ・ もともとの理解より更に深まった。実際に話してみて、より身近に感じた。
- ・ 利他的精神の重要性を認識した。
- ・ 自分とは異なる生き方の人と対面でお話させていただくことで、その相手の方の考え方や思いをストレートに受け止め、認めることができた。
- ・ 話をしたこと、聞いたことのなかった人達と対話できた感覚があつた。
- ・ 共感したり、自分の考えと照らし合わせることで前向きになれた。
- ・ 自分のコンプレックスが武器へと変わった。
- ・ 気づいたり、ショックを受けたり、でもありのままでいいんだって思った。
- ・ 人に頼ること、助けられることも大切に生きていこうと思った。
- ・ セクシュアルマイノリティの方の内面について、文字から伝わるもの以上の肉声の重みから、今までの認識が変化しました。
- ・ 実際に「本」として参加されている方々とお話できたことで、多様性というと違うのかもしれないが、色々な人がいて当たり前なんだよなという考え方がより自然に受けとめられるようになった気がします。
- ・ Yさんのお話をきいて、「障害者としてこれをするのは迷惑」「なんで迷惑」でハッとしました。
- ・ ご本人の悩み、考え方が分かり、自分の対応をどうすればよいか分かった。
- ・ 人の思い・考え方をまず聞いていこうと感じた。その人に思い、寄り添い、共に感じていきたい。

- ・このような機会があれば積極的に参加してみたいと思えた。
- ・自分が「LGBTQの当事者である」で終わるのではなく、もっと活動に参加したいと思った。
- ・自分自身の生活に役立てたいという気持ちが強くなりました。仕事だけでなく、日常的に実践できるように心がけたい。
- ・障害を持つ子のために自分も何か出来ることを前向きに取り組もうと思った。
- ・もっと、生きづらさを抱えている人の理由や生き様を知って、勉強を続けて自分の活動や支援に繋げていきたいと思います。
- ・自分の仕事に生かしたい。
- ・いつも会話する人とは年齢も社会的立場も違う方の話をきけて、社会貢献のために活動することについて考えさせられた。

特定の属性やその属性を持つ「本」の文化を知れたというもの、またもともとあった自分の中の考えを再認識、ないしは考え直すきっかけになったというもの、「本」に親近感、共感を抱くものなど、「読者」の中で起こった変化の度合いは様々である。特に今回顕著であったものは、対話で得たものを自身の生き方に結びつけ、そして今後何か活動に参加したり、仕事で生かしたりとそれらを社会に還元しようとする傾向が見られたことであった。ヒューマンライブラリーは個々の多様性の理解と偏見の低減に資する取組みであるが、さらに個々が「本」との対話で得たものを各自のコミュニティに持ち帰り、社会の多様性への寛容な姿勢をさまざまな方法で自ら体现し、それらを促進してくれることを強く願う。

2-5. 「本」アンケート結果

「本」に対しても、選択式・記述式の9の設問で構成されるアンケートを実施した。回収数は20名中15名、回収率は75%であった。ここでは特質すべき事項のみ報告する。

ヒューマンライブラリーへの参加の理由として（複数回答可）、「企画の趣旨、目的に共感したから」が80%と最も多く、この取組の社会的意義が理解されていることが分かる。次に「様々な人たちに出会いたいから」と「内容に魅力を感じたから」がともに66.6%と、「図書館」という仮想空間で一对少数の対話を繰り返すというヒューマンライブラリー独自のシステムも「本」にとってその参加意欲を掻き立てるものであると理解できる。また「以前から他のヒューマンライブラリーに参加し、楽しかったから」が60%、「知人、友人に勧められたから」が26.6%と徐々にではあるが、ヒューマンライブラリーの体験者が増え、その認知度が上がっていることがうかがえる。「また『本』としてヒューマンライブラリー参加してみたいか」という問いには「是非参加したい」が57.1%「都合がつけば参加したい」が42.8%と、全員が今後のヒューマンライブラリーの活動に対して好意的な姿勢を示した。

ヒューマンライブラリーに参加したことで考え方に変化があったかという問いに対して、「とても変化があった」が42.8%、「少し変化があった」が35.7%と過半数が何かしらの変化を感じているが、残りの21.4%は「あまり変わらない」という回答であった。前年度のアンケートでも類似した結果が出たが、これは「本」の中には自助グループでのリーダー的な役割を果たしている者、講演会や勉強会などの講師の経験者も多数いるため、普段から社会との接触も多く、必ずしも大きな変化を経験しなかったのではと推測する。次に（変化があった場合は）「どのような変化があったか」（記述式）の問に対する回答を一部抜粋して報告する。

- ・自分を更に肯定的に捉えられるようになった。
- ・カミングアウトのマイナスイメージがなくなった。
- ・初対面の人とでもじっくり落ち着いて話すことの大切さを改めて実感させられました。
- ・男性・女性の考え方の違いに気づき、良い学びをもらいました。
- ・自身でも振り返りができたり、色々と思いだしたりできる。
- ・色々な人がいるということ、色々な考え方、感じ方があるということは、頭ではわかっていても日常的に接点がないとすぐに忘れがち。こういう取り組みに参加することで、自分の感受性がリセットされたと思う。
- ・普段やっていることとほぼ同じなので、考え方が変わることはありませんでしたが、普段お話しすることのない方々とお話しする機会をいただき、新たな発見があり、良かったです。
- ・自分が思った偏見や誤解を持っている人は少ないと感じた。
- ・読者の皆さんが寄り添って下さる姿に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

次に「ヒューマンライブラリーに本として参加することの意義、価値はどのような点にあると思うか」(記述式)の問に対しての回答を一部抜粋して報告する。

- ・様々な人たちと出会えて、いろんな話をきけるから。
- ・初めて出会う方とひざを合わせて話せたことが嬉しかったです。
- ・近くで深く話をできること。
- ・普段は出会わないような人とも少しでも出会えるということ。
- ・繋がり、気づき、etc.
- ・自分のことを知ってもらうことで、社会や多様性に気付いてもらえること。
- ・理解と周知と共存。
- ・自分が感じている福祉、自分の活動を知ってもらうことのチャンスを頂けて感謝です。
- ・自分自身の整理と他の本の方への理解。
- ・自分の属性について改めて深く考えることができる。
- ・読者の人の質問などで、色々な視点があることに気づくことができる。
- ・自分自身を見つめ直す良いきっかけとなる。
- ・自分自身の生き様、仕事上で得た知識・経験を生かせる。
- ・自分のマイノリティを読者へのプレゼントにすることができる。トークイベントとしての30分間がちょうどいい長さで、頭の整理をしながら伝え合うことができる。
- ・普段目にすることのない社会の、多様性を「本」として提示するところだと思います。
- ・「普通の人」ってステキ、「普通じゃない人」個性のある人もステキ、自分は自分のままでいい、自分の事いっぱいこれから認めてあげる人生のスタートの日が「今日」自分との出会いであればこんなに嬉しいことはないです。

ヒューマンライブラリー参加後の変化においては、自己について振り返ることができ、さらに自己を肯定的に捉えられるようになったこと、そして「読者」側にも多様な考え方があることへの気づき、また自分の語りに耳を傾けてもらえることへの感謝が見られた。そして、それらも踏えて、多様な人と出会い自分を知ってもらうこと、自分自身をさらに知ることができること、自分が社会に貢献できるという喜びを得られることにヒューマンライブラリーの価値を見出していることが分かる。前年同様、今回のヒューマンライブラリーでも「本」が自己の経験や生き方を語ることによってそれらを再構築する

ナラティブ効果（菅原他、2018）があったと推測できる。

3. 今後の課題

自己の中にある固定観念や偏見に気づき、多様な生き方を認め合うことを目指すヒューマンライブラリーは現代の社会のニーズに合致する意義ある取組みである。また主催側の「学生司書」にとってもヒューマンライブラリーは多くの学びを与えてくれる。今後もこのヒューマンライブラリーを継続していく上でより意義を高めるため、筆者の経験を踏まえて課題を提起したい。

はじめにアクセシビリティの観点から考える。ヒューマンライブラリーは参加するにあたり特別な知識や準備は必要なく、また入場無料・予約不要で開催されるものが多く比較的敷居の低い参加しやすいイベントである。青陵でのヒューマンライブラリーでは高校生から参加可能、それ未満は保護者同伴を条件に開催したが、当日は小学生の子供を連れた参加者も見られ、まさに幅広い年代の人々に足を運んでもらった。しかし「足を運ぶ」ということは、このようなイベントに参加したいという意思があるということで、元々多様性に対する興味や関心がある人、多様なサブカルチャーが共存する社会に寛容に対応できる資質が備わった人々が参加しているとも考えられる。しかしデンマークで始まったヒューマンライブラリーがその最初の開催場所を北欧最大のロックフェスティバル⁹としたように、人々がヒューマンライブラリーに足を運ぶのではなく、ヒューマンライブラリーが多様な人々が集う場に出向き、そこで「本」と「読者」の偶発的な出会いを作ることも必要ではないか。日本でも2018年に麗澤大学山下ゼミが千葉県柏市、柏駅近くの歩行者天国で路上でのヒューマンライブラリーを開催し4冊の「本」を貸し出した¹⁰。今後はより多くの人々に足を運んでもらうためさらにアクセシビリティを高めるだけでなく、こちらから「足を運ばない」人々にアクセスし、「本」との出会いに繋げる試みも必要である。また早い時期から多様性に触れる重要性も考えると、小学校や中学校での開催も検討してみたい。

アクセシビリティに配慮すること、それはバリアフリーの環境を確保することである。ヒューマンライブラリーの開催会場が大学である場合は、比較的、物理的なバリアフリーは確保されている。身体的な障害を持つ「本」や「読者」のサポートも「学生司書」が行える体制は整えている。2回のヒューマンライブラリーを終えて難しいと感じたことは、聴覚障害を持つ「読者」への情報保障である。新潟市は無償で手話通訳や要約筆記者の派遣を行っているが、市ないしは福祉関係団体が実施する事業、または公的機関での手続き、医療機関での診療などの目的に限定される。新潟県からの派遣は有償で、市、県いずれも人数に限りがある。ヒューマンライブラリーは「読者」が個別に「本」を選び、自由に「読書」に参加する形式であるがゆえに、聴覚障害を持つ「読者」が多数参加した場合、個々に対応できるだけの通訳者や筆記者を確保することは難しい。今回は要約筆記者3名1組を県から派遣してもらい、情報保障制度利用希望者からの事前予約を受け付け、要約筆記が入る時のみ「読書」の会場を筆記用のモニターがあらかじめ設置してある会場に移し対応した。今回この情報保障制度を利用した「読者」は3名と少人数だったため対応できたが、今後利用希望者が増えた場合の対応を検討しなければならない。

次に「対話」についてである。まだ我々日本人は「対話」というものに慣れていないという現状がある。

⁹ 当初は“Stop the violence”「暴力廃絶」を目的として2000年に北欧最大のロックフェスティバル、ロスキルド・フェスティバルの企画としてデンマークで行われた。

¹⁰ 2018年11月18日（日）柏駅東口ハウディモールにて麗澤大学ヒューマンライブラリー（山下ゼミ）が路上ライブ「ヒューマンライブラリー」を開催。

昨今子供たちの思考力や判断力を育成するために始まったとされる哲学対話（梶谷2018、p.29）の大人向けイベントや、対話をベースにしたさまざまな催しが開催されており、若干のブームにもなりつつあるが、多くを語らず察することを美德とする文化が根幹にある日本人にとって「対話」というものはまだハードルの高いものではないか。ヒューマンライブラリーが「本」との「対話」であると聞いて、参加を躊躇してしまったという声も聞く。実際に筆者もヒューマンライブラリーのリハーサルでは「読者」の発言を促すことを重点的に「本」と意見を交換し合った。しかし、「考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門」の著者である梶谷は対話のルールの一つとして「発言せず、ただ聞いているだけでもいい」とあげている（2018、p.46）。対話では発言の内容が自由であるのと同じように発言のタイミングも自由であり、それが許されなければ心で自由に考えることもできない（2018、p.60）。もちろん対話は互いの発言の重なり合で発展していくものであり、自由な発言は大いに期待されるが、まずは黙って「自己と対話する」ことも歓迎し、「読者」に対しての「対話」のハードルを下げる必要もあるのではと考える。

それとは対照的に、発言したいと思う「読者」を躊躇させるのが「同意書」の存在である。「同意書」は社会的にマイノリティとされる「本」とマジョリティとされる「読者」の力を対等する役割があるとされており、また「本」を守るために必要である（駒沢大学社会学科坪井ゼミ編2017、p.65）。しかし、前述したとおり、「『本』を意図的に傷つけてはいけない」という文言が真の「対話」を妨げてはいないか。筆者自身「読者」の経験もあるが「意図的」ではないにせよ、どのような発言が「本」を傷つけてしまうかわからないという状態が、発言を躊躇させてしまうことは確かである。学生が「読者」として参加した際に「相手のことを傷つけないように、相手の気持ちを察しながら、どこまで発言していいか探りながら対話することは難しかったが、良いコミュニケーションの練習になった」と感想を述べていたが、ヒューマンライブラリーは「察しのコミュニケーション」の練習の場で良いのだろうか。今後は「同意書」の内容も検討し、いかに「読者」に自由に発言してもらうか、その方法を模索したい。

「対話」にはある程度その流れを導くファシリテーターの役目があることが望ましい。時として「読者」がその役目を担ってくれるときもあるが、そうでないときは「本」がその役を担えることが理想である。そのためには「本」の勉強会の開催や、前述の「同意書」の内容の精査を含めた「対話」の発展を目指して「本」と協働で考えていける場を設けたい。

最後に「学生司書プロジェクト」の教育効果についてである。ヒューマンライブラリーは学生のアクティブラーニングには最適な場である。一連の活動を通して学生の認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験値の向上が認められたという研究報告や（山下、2016）異文化感受性の発展も示唆されている（山下、2018）。しかしこれらは学生に主体性を持たせ、「本」の選定から参加依頼、イベントの告知・宣伝、時には資金集めまでを含めた総括的な運営を任せた結果として得られる教育効果である。筆者の立ち上げた「学生司書プロジェクト」は筆者のゼミ生である短大2年生が中心で、ヒューマンライブラリー実施に向けた準備が就職活動の最も忙しい時期と重なる。ゼミ以外の有志学生も学年、学科が異なり、さらに学外での実習などがあり物理的な協働が難しい。これらの理由で主な活動を「本」の「あらすじ」作成と当日の運営と限定しているが、はたしてこれで十分な教育効果が得られるのだろうか。また、前年度12名であった参加学生が今回は33名と大幅に増え、多くの学生が「多様性の理解」といったテーマに関心を示してくれることは喜ばしいことであるが、今までは複数担当する必要があった「本」が、学生2名1組で1～2冊程度の「本」を担当する程度にとどまり、負担は減ったが「あらすじ」作成を通じての多様な「本」との関わりの機会も減ってしまった。さらに、学生教育を目的としてヒューマンライブラリーを実践するというより、大学の対外的な地域貢献イベントであるヒューマンラ

イブラリーを教育の場として活用していることから、本来は学生主体で運営できる規模のヒューマンライブラリーから始めることが望ましいが、「本」20冊、「読者」100人規模の大きなイベントを想定しなければならず、イベントの成功が絶対であり、教育の場として学生に葛藤する猶予や失敗する機会を与えられていないのも事実である。

しかし「学生司書プロジェクト」に参加した学生の満足度は非常に高い。「あらすじ」作成を振り返ったレポートからも分かるように、学生は多様な属性を持つ「本」との出会いを通して、その属性に関する知識を深めるだけでなく、内省力も高まり、社会の多様性を受け入れようとする姿勢が見られる。実際に「街で視覚障害の方を見かけ、今までなら絶対に声をかけなかったが、今回は自ら声がけをして自分の腕を掴んでもらい、その方が行きたかった場所まで案内した」という学生もあり、学生の中のこの変化一つだけをとっても、「学生司書プロジェクト」の意義があることは確かである。2回のヒューマンライブラリー開催を経て、筆者自身の経験値も上がったことから、何ができるのか、どこまでやりたいのかを学生に考えさせ、今後は運営の主体を少しずつ学生に移行していくことを検討したい。また、学生向けの勉強会は継続するとともに、ヒューマンライブラリーに向けての「本」のための勉強会、あるいは茶話会なども開催し、そこへの学生の参加も促すことでより多くの「本」とのコミュニケーションの機会を設けていければと考える。

4. おわりに

新潟青陵大学・短期大学部での2018年、2019年の2回のヒューマンライブラリーの開催を終え、アンケート結果や実際に聞く声から、この取組みが「読者」「本」そして「司書」から一定の評価を得ていることは明確である。また今回は県の事業として行ったため宣伝効果も高く、県内外に新潟のヒューマンライブラリーの取組みが紹介された。さらに新潟日報¹¹やNHK新潟¹²で特集が組まれ、NHKでは全国版¹³、海外版¹⁴でも放送されるなどヒューマンライブラリーの認知度の向上にも貢献した。加えて、ヒューマンライブラリーを自分のコミュニティや施設等で開催したいといった声もあがっており、新潟県内でのヒューマンライブラリーの広がり兆しも見せている。

新潟青陵大学・短期大学部社会連携センターでは2020年も第3回目のヒューマンライブラリーの開催を予定おり、「学生司書プロジェクト」も引き続き継続していく予定である。今後も、前述した課題をもとに、学生の教育効果の向上とヒューマンライブラリーのさらなる発展、そして共生社会の実現に寄与していくことを願う。

¹¹ 2019年11月10日（土）新潟日報朝刊福祉版に「対話重ね広がる理解」と題して筆者が講師を務めた岩室でのヒューマンライブラリーのセミナー＆体験会の様子が紹介された。また令和元年元旦新潟日報社説でも青陵でのヒューマンライブラリーが言及された。

¹² 2019年11月13日（水）「NHK新潟ニュース610」にて紹介。

¹³ 2019年12月6日（金）NHK「ひるまえはっと〜関東〜」12月20日（金）「BSニュース4K」にて紹介。

¹⁴ 2020年1月24日（金）NHK WORLD-JAPAN「NEWS ROOM TOKYO」にて紹介。

参考文献

- 梶谷真司『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』幻冬舎新書、2018、29項、47項、60項。
- 工藤和宏「多様性と共に生きる—『ヒューマンライブラリー』の運営を通じた『社会人基礎力』成長の物語」
獨協大学英語研究、2012. 10、99-118頁。
- 駒沢大学社会学科坪井ゼミ編著『ココロのバリアを溶かすヒューマンライブラリー事始め』人間の科学新社、2017。
- 菅原早紀・照山絢子「ヒューマンライブラリーにおける対話と自己理解—繰り返し参加する「本」の語りから」
異文化間教育、48、2018. 8、116-130頁。
- 関久美子・岩森三千代・池宮真由美・佐藤裕紀「ヒューマンライブラリーの実践と学生への教育効果：多様性の理解を目指す試みとして」新潟青陵大学短期大学部研究報告、49、2019. 3、4-41項。
- 坪井健「ヒューマンライブラリーから見た異文化間能力—コンピテンシーを育てる実践の立場から」異文化間教育、45、2017. 3、65-77頁。
- 松下佳代（編）「ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために」勁草書房、2015、23項。
- 山下美樹「学生の汎用的能力向上を目的とした大学と地域を繋ぐアクティブラーニング・ゼミプロジェクト—『ヒューマンライブラリー』実践の振り返り—」麗澤大学紀要、2016. 1、99、85-89項。
- 山下美樹「ゼミプロジェクトヒューマンライブラリー 実践と異文化感受性発展」麗澤学際ジャーナル、2018. 10、78-82項。
- 横田雅弘「ヒューマンライブラリーとは何か—その背景と開催への誘い」加賀美常美代・横田雅弘他編著『多文化社会の偏見・差別：形成のメカニズムと低減のための教育』明石書店、2012、150-171頁。
- 横田雅弘「ヒューマンライブラリーで学生は何を学んだのか—『司書』として参加した大学生のレポートから」
坪井健・横田雅弘・工藤和弘編著『ヒューマンライブラリー：多様性を育む＜人を貸し出す図書館＞の実践』明石書店、2018、248-271頁。